



年上のネイリストさん

~閉店後の、あなたの指先に~

年上のネイリストさん ～閉店後
の、あなたの指先に～【体験版】

蜜夜文庫

↳ 閉店後の、あなたの指先に↳

蜜夜文庫【体験版】

⋮

第二話 手元のコンプレックス

||scene|scene01.png)

自分の手が、嫌いだった。

初夏の午後、相沢湊が取引先のオフィスビルを出ると、梅雨明け間近の湿った空気が、シャツの襟のあいだにまとわりついてきた。空はまだ薄曇りで、それでも雲の切れ間から差す光は、もう夏のそれだった。アスファルトから、雨の名残の匂いが立ちのぼっている。二十四歳、社会人二年目。営業の外回りで、一日じゅう名刺を配り、頭を下げて歩く毎日だ。

さっきの商談を、湊は歩きながら反芻していた。中身のことではない。名刺を差し出したとき、先方の課長の視線が、ほんの一瞬、湊の指先に落ちたのだ。気のせいかもしれない。けれど湊には、はつきりとわかった。この爪を、見られた、と。

深爪気味に噛んだ、短くいびつな爪。両手の親指の脇には、めくれかけたささくれ。子供の頃からの、爪を噛む癖だった。緊張すると、無意識に指先が口へいく。慣れない仕事に追われて、この一年で、癖はいつそうひどくなった。荒れた指先を、名刺という白い紙の上に、毎日、何十回も差し出す。そのたびに、見られている気がして、指を丸めたくなる。

——こんな手で、よく人前に出られるな。

自分でそう思ってしまうのが、いちばんこたえた。

その夜、残業を終えてアパートに帰り着いた湊は、ろくに食べる気力もないまま、スマートフォンを眺めていた。指先の荒れが気になって、なんとなく「ハンドケアメンズ」と検索したのは、ほんの気まぐれだった。ネイルサロンなんて、女性が行く場所だと思っていた。けれど検索結果の下のほうに、小さな一軒がひっかかった。

「nail room Nagi ——男性のハンドケア・ネイルケアも承ります——」

雑居ビルの一室にある、個人経営の小さなサロンらしかった。写真は数枚だけ。木目のデスクに、あたたかい色のライト。派手さのない、静かな内装。営業時間の最後に、「最終予約 20:00」とあった。仕事終わりで、間に合う。

指先を、じつと見た。噛んだ跡の残る爪。めくれた皮膚。誰かにこの手を委ねるなんて、考えたこともなかった。恥ずかしい。きつと、笑われる。それでも——このままでいたくない、という気持ちだが、その夜はなぜか、恥ずかしさより少しだけ、大きかった。

予約フォームに、震える指で、名前を打ち込んだ。送信ボタンを押す前に、湊は、しばらく、迷った。やっぱり、やめようか。男が、ネイルサロンなんて。笑われるかもしれない。断られるかもしれない。けれど、画面の中の、あのあたたかい色のライトの写真を、もう一度見て——湊は、目を閉じて、送信ボタンを、押した。窓の外で、遠く、雷が鳴っていた。梅雨明けは、もうすぐだった。

※

翌週の火曜、二十時。

雑居ビルの、古いエレベーターを四階で降りると、廊下の突き当たりに、その扉はあった。すりガラスの向こうに、あたたかい色の明かりがともっている。「nail room Nagi」と、小さなプレート。湊は、扉の前で、たつぷり十秒、立ち止まった。汗ばんだ手のひらを、そっとズボンで拭う。指先の爪が、また、口元に寄りそうくなるのを、こらえた。

意を決して、扉を押す。

思ったよりなめらかに、扉は開いた。

一步入った瞬間、ふわりと、甘い香りに包まれた。ハンドクリームの匂いだろうか。その奥に、ほんのりとアロマの、落ち着いた香り。外の湿った夜気とは別世界の、清潔で、やわらかな空気だった。

「いらっしやませ」

奥から、女性の声があった。低すぎず、澄んだ、まつすぐな声。デスクの向こうから、その人が立ち上がる。黒髪を、後ろでゆるくひとつにまとめている。シンプルな黒のエプロンを、白いブラウスの上につけていた。まとめきれなかった髪が、ひと筋、頬のあたりに落ちてきている。年上だ、と一目でわかる、静かな落ち着きがあった。

「ご予約の、相沢さまですね。凧沙玲奈です。この店を、一人でやっています」

「あ……はい。相沢、です」

湊は、しどろもどろに頭を下げた。玲奈は、やわらかく微笑んで、施術デスクの前の椅子を、手のひらで示した。

「メンズのハンドケアは、初めてでいらつしやいますか」

「はい。あの……こういうところ、来たこと、なくて」

「大丈夫ですよ。緊張なさらないで。……どうぞ、おかけください」

促されるまま、椅子に腰を下ろす。玲奈が、向かいに座った。デスクを挟んで、膝が触れそうな距離だった。ライトが、二人の手元だけを、あたたかく照らしている。彼女の側から、アロマと、その奥に、清潔な、洗いたてのような香りが、ふわりと漂った。

「では、失礼して。……お手を、拝見しますね」

玲奈が、そつと、両手を差し出した。

湊は、ためらった。この手を、見せるのか。噛んだ爪も、ささくれも、全部。とつきに、指を丸めたくない。けれど、逃げるわけにもいかない。おそろおそろ、右手を、玲奈の手のひらの上に、乗せた。

その瞬間、息が、止まった。

玲奈の手のひらは、あたたかかった。細くて、しなやかで、けれど芯のある指。その両手が、湊の右手を、下から、そつと包み込む。まるで、壊れものでも扱うように。彼女は、湊の指を一本ずつ、しげしげと見た。湊は、身をすくめて、その視線に耐えた。きつと、顔をしかめられる。あるいは、内心で呆れられる。けれど、玲奈は、そうしなかった。

「……お仕事、頑張っていらつしやるんですね」

顔を上げずに、指先を見つめたまま、玲奈は言った。

「え……」

「爪を噛んでしまうのは、緊張なさる方に、多いんです。それだけ、真面目に頑張っていらっしゃるんだと思います。……大丈夫。ここから、きれいにしていきましょうね」

責める色は、どこにもなかった。ただ、湊の手を、まるごと肯定するような、静かな声だった。湊の胸の奥で、ずっと縮こまっていた何かが、その一言で、ほんの少しだけ、ゆるんだ。この手を、笑われなかった。それだけのことが、湊には、思いがけないほど、うれしかった。

「まず、ぬるま湯で、指先をふやかしますね」

玲奈は、小さなボウルに張つたぬるま湯に、湊の指先を、そつと浸した。あたたかい湯が、荒れた指の縁に、じんわりと沁みる。それから、彼女は、湊の手を膝の上のタオルに置いて、施術を始めた。

甘皮を、優しく押し上げていく。細い金属の器具の先が、爪の根元を、ゆつくりとなぞる。くすぐったいような、けれど痛くはない、繊細な感触。玲奈は、うつむいて、湊の手元に、じつと集中していた。すぐそこに、彼女の顔があった。伏せられた睫毛が、長い。ライトの光を受けて、その先が、かすかに金色に光っている。真剣な横顔だった。呼吸が、聞こえそうなほど、近い。

「……力、抜いてくださいね」

玲奈が、ふと、囁くように言った。

「え」

「手に、力が入っています。私に、預けてしまって、大丈夫ですよ」

言われて初めて、自分がずつと、手をこわばらせていたことに、気づいた。人に手を触られることに、こんなにも身構えていたのか。湊が、そつと肩の力を抜くと、玲奈の手のひらの中で、指が、ふつとゆるんだ。その、預けた瞬間の安らぎに、湊は自分でも戸惑った。誰かに、こんなふうに手を委ねたのは、いつ以来だろう。

甘皮を整え終えると、玲奈は、湊の爪の一枚一枚を、細いファイルで、そつと削っていた。囁んで、いびつになつていた爪の形が、彼女の手の中で、少しずつ、なめらかに、整っていく。玲奈は、うつむいたまま、根気よく、その作業を続けた。時折、湊の手を、少し角度を変えて、光にかざす。爪の形を、確かめるように。その、真剣な眼差しが、すぐそこにあつた。湊は、自分の手が、こんなにも、丁寧に扱われるのを、生まれて初めて、経験していた。会社では、いつも、急かされてばかりだった。ここでは、湊の、たつた十本の爪のために、一人の人が、これほどの時間を、注いでくれている。そのことが、不思議と、湊の心を、静かにした。

ハンドクリームを、玲奈が手に取った。甘い、けれど甘すぎない、やわらかな香りが、ふわりと立つ。彼女は、それを湊の手の甲に伸ばし、指の一本一本を、丁寧に揉みほぐしていった。荒れた指先に、しつとりとした潤いが、じわりと沁み込んでいく。玲奈の親指が、湊の手のひらの真ん中を、円を描くように、ゆつくりと押した。

「……あ」

思わず、声が漏れた。

「痛かったですか」

「いえ……その、気持ちよくて。ここ、こんなに凝ってるって、知らなくて」

「手も、疲れるんですよ。……たくさん、使っていらっしやるから」

玲奈は、少しだけ、微笑んだように見えた。うつむいた顔のまま、湊の手を、包み続けている。窓の外を、車のヘッドライトが、ゆっくり流れていった。静かな店内に、ハンドクリームを揉み込む、かすかな音だけが、響いている。湊は、その、包まれている時間の中で、体の芯から、力が抜けていくのを感じた。この一年、ずっと張りつめていた何かが、彼女の手のひらの温度に、少しずつ、溶かされていくようだった。

※

施術は、四十分ほどで終わった。

「はい。……見てください」

玲奈が、湊の両手を、ライトの下に、そつと差し出した。囁んで短かった爪は、きれいに整えられて、甘皮の処理された根元が、すつきりしている。荒れていた指先が、しつとりと潤って、艶を帯びていた。同じ手とは思えなかった。

「……すごい」

「よかった。……男性のお手も、ちゃんと、きれいになるんですよ」

湊は、自分の手を、しばらく見つめた。この手を、明日、人前に出せる。名刺を、恥ずかしがらずに、差し出せる。たったそれだけのことが、胸の奥を、あたたかくした。

「あの……また、来ても、いいですか」

「もちろんです。爪は、伸びますから。……三週間に一度くらいが、目安ですね」

「仕事が、終わるのが、いつもこのくらいの時間で。最後の予約しか、取れないかもしれませんけど」

「大丈夫ですよ」

玲奈は、予約台帳を開きながら、少しだけ、笑い方を変えた。

「うち、最後の時間は、いつも私一人だけなので。……ゆつくり、できます」

その「一人だけ」という言葉に、ほんのわずかな、さびしき色が滲んでいたことに、湊は気づいた。一人で店を営み、一日の終わりの時間を、いつも一人で過ごしている——その静けさを、彼女がどう抱えているのか、湊には、まだわからなかった。会って、一時間も経っていない。聞けるはずも、なかった。

次回の予約を、三週間後の同じ時間に取った。玲奈が、台帳に、細いペンで名前を書きつける。相沢湊さま、と、流れるような文字が、すつと紙の上に生まれた。爪をケアする、あのしなやかな指で書かれたその字を、湊は、横で見ている。

「では、また。……お仕事、無理なさらないでくださいね」

見送りに扉のところまで出た玲奈が、そう言った。生徒への決まり文句のようなものだと、わかっているも、その「無理なさらないで」が、疲れきった湊の胸に、じんと沁み込んだ。

※

雑居ビルを出ると、外はもう、すっかり夜だった。梅雨明け間近の生暖かい風が、頬をなでていく。湊は、右手を、街灯にかざしてみた。きれいに整った爪。しつとりと潤った指先。そして——そこにまだ、玲奈の手が包んでいた、あのあたたかい温度が、残っている気がした。

——ただの、ケアだ。

自分に、そう言い聞かせる。相手はネイリストで、自分は客で、あの手の包み方は、きつと誰の手に対して、おなじなのだ。わかつている。わかつているのに、駅までの夜道を歩きながら、湊の頭の中では、うつむいて手元に集中する、あの睫毛の長い横顔が、ずっと消えなかった。

そして、指先から、ふとした拍子に、あの甘いハンドクリームの香りが立った。家に着いても、風呂に入っても、布団に入っても、その香りは、うすれるだけで、消えなかった。灰色に塗りつぶされていた毎日のなかで、三週間後の火曜の夜。その一日だけが、そこだけ、ぽつんと、やわらかな色で染まっているように、思えた。